

## ニラ栽培と

## \* コーティング肥料

山形野菜センター

相 沢 富 夫

ニラは多年性作物で耐暑性や耐寒性に強く、病害虫の被害なども他の作物より少なく栽培が簡単で、どこでも誰れでも作れる作物である。そのうえ播種期、定植期、収穫などの作業の幅が広く、他の農作業と競合するような場合でも、その調節が容易で経営上大変有利な作物である。

そのような理由から、山形市近郊では数年前から急激に栽培が増加し、現在約40ha(推定)位が散在的に栽培されており、その主な出荷先は京浜市場である。

## 1) ニラの品種

ニラの品種改良は他の作物に比べて非常に遅れておりそれだけ品種数も少ない。現在栽培されている品種は在来種を含めて10数品種あげられるが、なかには異名同種もいくつか考えられる。

そのうち東北地方で栽培されている品種は、グリーンベルトが最も多く、福島県ではハウス栽培で冬期出荷を行っている。次は、たいりょうニラで露地とトンネル栽培が主体であるが、宮城県では1部ハウスで栽培し、1月から出荷しているところもある。その他僅少であるが常緑大葉や仙台大葉も栽培されている。

## 2) 生態的特性

生育最適温度は18~20℃で春の新葉は4~5日ごとに1枚ずつ出葉し、品種によっても異なるが、たいりょうニラは1日平均2~3cm位ずつ生長する。分けつはネギ類の仲間でも多く、春蒔した、たいりょうニラは6月下旬頃より分けつを始め、11月上旬までに平均2倍以上2年目の秋には大体5倍近い本数に増加する。それでもグリーンベルトに比べて、約半分位の分けつ数である。

花芽分化は高温長日で行なわれ、ネギ類としては珍しい特性をもっている。分化時期は品種や栽培環境、株の老若および栄養状態によって異なる。山形近郊での、たいりょうニラは6月上旬が分化始めであり、従って抽台も他品種より約3週間位早く、山形では6月下旬から穂を摘み取り「グリーンボール」の名で市場に出荷している。

## 3) 栽培の概要

1) 育苗、山形は積雪期間が長いので、播種期は4月

上旬になる。苗床予定地には苦土石灰を散布して土壌pHを矯正し、堆肥と化成肥料を全面に散布して耕耘し、その後播種床を作る。

施肥量は1a当り、苦土石灰20kg、完熟堆肥400kg、CDUタマゴ化成6kg、燐硝安加里10kg、BM重焼燐4kg位とする。播種床は幅1.2m、播幅1mのやや揚床に作り、10cm間隔に条播する。播種量は10a当り8dl位でよい。

播種後20日位で発芽する。或る程度生長したら適宜間引、除草、条間の中耕を行い、6月下旬~7月上旬の梅雨期を利用して定植するのであるが、その時期まで本葉6枚(分けつ始め)の大きさに生育させることを目標に管理する、そのためには、1a当り燐硝安加里S604を3kg位いつつ2回位追肥を行う必要がある。

2) 本畑の準備と定植 定植はおそくとも7月上旬に行う。この時期を逸すると、乾燥期に入るので9月上旬になり、苗が老化して活着も悪く、また休眠に入る11月までの期間が短かく、株養成が不十分なため、翌春の収量は少なくなる。従って、定植を早め、株養成期間を長くとり、株の充実を計ることが非常に大切である。

栽植距離は露地栽培で畦中1m、株間30cm条間30cmの2条植え、トンネル栽培は畦幅1.5m、株間26cm、条間30cmの3条植が適当である。元肥はそれぞれの畦幅ごとに管理機で施肥溝を深く掘り、そこに堆肥と化成肥料を施して畦を作る。普通は半畦とし定植活着後に追肥土寄せを行って、やや高畦にする。但し、水田転作や排水の悪い畑では、最初から高畦にする。

苗は苗床から掘り取って乾燥させないように注意し、大きさ別に分類する。本葉6枚位の苗は1株6本植えとし、4~5枚の苗は7本位植えるのが、収量からみて最も適当である。

3) 定植後の管理 活着したら、なるべく早めに追肥中耕、土寄せを行う。その後雑草が出始めたら、アクチノール10a120gを水100ℓにとかけて散布する。9月に入ったら、もう1度追肥(燐硝安加里S604を10a当30kg位)を行い、株の充実をはかる。

11月になって休眠に入ったら、枯葉の除去と一緒に除草し、クロロアイピーンを10a当300g、水200ℓにとか

\* コーティング肥料(被覆燐硫安加里13-3-11)

……別名ロング……

して散布すれば、翌春融雪後も畑は非常に美しくなっており、収穫は極めて楽である。翌春収穫ごとに磷硝安加里を追肥し、収穫が終わった時点で畦間に堆肥とコーティング肥料、石灰を散布して管理機で中耕する。これが即ち2年目の元肥になる。その場合3分の1位断根して、新根の発生をうながすことが、その後のニラの生育に良い影響を及ぼすことになる。

4) 施肥量とコーティング肥料

ニラは多年生の作物で1度植えたら3年位収穫を続け、3～4年目に苗の更新をするのが普通であり、しかも1回の収穫で約1tの収量が上がり、少なくとも年間3～4tの収量となる。

従って出来るだけ深耕施肥を行うと共に、肥料も長く効いているコーティング肥料を施すことが最も適当である。

定植初年目の施肥量は、10a当り苦土石灰200kg(前後(pH6.5目標)全面散布、その他は深耕して溝施肥とする。堆肥はなるべく多く(4t以上)施し、その上に①コーティング180タイプ120kg、②磷硝安加里S604を90kg、③BM重焼燐を30kg施して畦を作る。(10a当りの成分量はN30kg、P23.1kg、K25.8kg)これが元肥で、他に活着直後と9月上中旬頃の2回に追肥を行う。1回量は磷硝安加里S604を大体30kg位とする。

5) コーティング肥料の試験結果

昭和56年度に山形県経済連からの委託を受けて、有機化成肥料とコーティング肥料のニラに対する比較試験を行った。その結果は表1および2の通りである。なお収穫年度の翌57年8月2日の台風10号と9月13日の台風18号による水害のため生育障害をうけ、秋刈りの収量差は縮まったが、それでも春刈同様コーティング肥料区は最高の収量であった。

備 考

- ① コーティング肥料区は100タイプと180タイプを1対2の割合に施した。
- ② 10a当りの成分はN32kg、P40kgに統一したが、Kは3区の26.7kg、4区の27.1kgで他の2区は32kgになった。
- ③ 各試験区の両側に番外を設け、他区の影響を受けないように配慮した。肥料は定植前の元肥に施し、追肥は行わず、翌春と秋に各2回づつ刈取って調査した。

以上のように、多年生作物のニラに対するコーティング肥料は、他の有機化成に比べて極めて効果が高く、特に春刈の場合は、予想以上の増収であった。(水害がなければ、秋刈でも相当の差が生じたのではないかと考えられる。)

表一 春 刈 収 量 調 査 (調査株数は中央部の20株)

項目 区名	第1回目 調査5月6日		第2回目 調査5月29日		2回の合計		同左比率(%)		花 蕾 抽台数
	茎 数	重 量	茎 数	重 量	茎 数	重 量	茎 数	重 量	
A 社有機化成1	260本	2,730kg	368本	2,370kg	628本	5,100kg	100.0%	100.0%	156本
B 社有機化成2	272	4,070	366	2,660	638	6,730	101.6	132.0	164
C 社有機化成3	230	3,330	300	3,250	530	6,580	84.4	129.0	190
コーティング肥料4	296	4,510	372	3,530	668	8,040	106.4	*157.6	192

表二 秋 刈 収 量 調 査 (調査株数は中央部の20株)

項目 区名	第1回目 調査9月6日		第2回目 調査9月24日		2回の合計		同左比率(%)	
	茎 数	重 量	茎 数	重 量	茎 数	重 量	茎 数	重 量
A 社有機化成1	376本	1,275kg	402本	2,460kg	778本	3,735kg	100.0%	100.0%
B 社有機化成2	410	1,300	418	2,390	828	3,690	106.4	98.8
C 社有機化成3	382	1,120	400	2,200	782	3,320	100.5	88.9
コーティング肥料4	436	1,320	464	2,500	900	3,820	115.7	102.3